

学文と学問

山田 健三

0. はじめに

本稿は、ガクモンという漢語に対応する（した）二つの漢字表記の交渉史を描くモノグラフである。

ガクモンという漢語に〈学問〉と〈学文〉との2つの表記があり、中世日本語に於いては〈学文〉の方が優勢だったことは、人のよく知るところである。以下、学文>学問、という表記の歴史的な変遷について、概略の記述と解釈を試みる。

1. ヘボンの辞書にみるガクモン

話をヘボンから始めよう。

周知のようにヘボンの辞書は近代日本語の基礎資料として、極めて高い価値を持っている。〔注1〕

GAKU-MON, ガクモン, 學問, n. Learning, literature, science.

—szru, to study, to read, to apply one's self to learning.

—jo, a school house. —ga agatta, to make progress in learning.

ヘボンは初版でこのように記し、基本的な記述は2版・3版でも変わっていない。しかし、初版に先立つ自筆草稿（明治学院大学図書館蔵）では、

Gakumon 學文. literature. letters. learning.

(applied only to Chinese lit)

" szru. to study Chinese literature.

とあり、「學文」の漢字表記が採用されている〔注2〕。これは、ヘボン自身が自らの

辞書の基礎資料としたらしい『日葡辞書』が、ガクモンを「Bunuo manabu (文を学ぶ)」とパラフレイズしているのを引いてきているかも知れない〔注3〕。

もう一つ、ヘボンが序文で触れているメドハーストの語彙集〔注4〕には、

(英和の部) Study Gakf'mon ガクモン 學門 p.57

(和英の部) ガクモン 學問 Gakf'mon Study p.213

とある。ヘボンは、メドハーストの語彙集をそれほど彼の辞書に取り込んでいないようではあるが〔注5〕、ガクモンの表記に関しては、メドハーストのそれが結局は採用されることとなった。堀達之助『英和对訳袖珍辞書』(1862)、村上英俊『佛語明要』(1864)、といった著名な辞書に *science* の訳語としてのガクモンの表記が〈学問〉で現れるように、この時期には〈学問〉の表記の方が一般的な慣用として多く用いられていた。(ちなみに異体字としての「学」「學」「孛」の差は問題にしない。)

さて、草稿と初版に見られる記述の変更は、表記のみではなく、むしろ大きく、その意味記述に違いが見られる。「applied only to Chinese lit」という限定が除かれ、替りに「science」という訳語が追加されている。ここに、ガクモンの意味変化の跡が顕著にうかがえるが、そのことについては、また後で触れよう。

2. ガクモンの鑄直し

ところで、中国側の資料を精査したわけではないので、確かなことは言えないが、〈学文〉表記は漢土にはどうも見えないようである。その意味で〈学文〉はおそらくえせ漢語である。ガクモンに異分析を加えた民衆語源のなせるわざである。ただ、その背景にはおそらく〈学文〉の文字列をちょうどひっくり返した〈文学〉が関わりを持っていたと、私は睨んでいる。

Gacumon. Bunuo manabu. Estudo de letras, ou sciencia.

(文を学ぶ。文字の勉強、または学問。〔注6〕)

Bungacu. Fumi manabu. Estudo, & sciencia de livros,

& bom estilo de cartas, &c.

(文学ぶ。書物や書状の立派な文体などを学習すること、または、その学問)

『日葡辞書』によれば、ガクモンもブンガクも“Estudo”であり、“sciencia”である。周知のことではあるが、この当時のブンガクの意味は現代のそれとは大きく異なっている。ガクモンとブンガクがかなり近い関係にあることは、一方が“letras (文字)”の、他方が“livros, & bom estilo de cartas, &c (書物や書状の立派な文体)”をそれぞれの対象としていることからよく判る。たとえば、『倭語類解』に示された「文学」のシソーラスは次の通りである。(括弧内は、ハングルによる音注をカナ表記に近似的に翻字しておく)〔注7〕

文 (フミ)、學 (マナブ)、教 (オシユル)、訓 (オシエ)、
 工夫 (ケイコ、クフウ)、誦 (チュウヨミ、ソラニヨム)、習 (ナラウ)、
 講 (コウシャク)、讀 (ヨム)、吟 (ギンジル)、題 (ダイ)、
 註 (チュウ)、風月 (フウゲツ)、次韻 (ワイン)、篆 (コモンジ)、
 寫 (カキ)、畫 (クック)、點 (テン)、正書 (シン)、草書 (ソウシ)、
 半行 (クヅシ)、能筆 (ノウヒツ)、法帖 (テホン)、記草 (シタガキ)、
 日記 (ヒチョウ、ニッキ)、曆書 (コヨミ)、諺文 (オンモン)、畫 (エ)、
 水墨 (スミエ)、冊 (ショモツ)、卷 (マキ)、紙 (カミ)、
 紋紙 (カラカミ)、色紙 (イロガミ)、筆 (フデ)、墨 (スミ)、
 硯 (スズリ)、硯箱 (スズリバコ)、硯滴 (ミズイレ)、書案 (ツクエ)、
 書鎮 (ササン〔注8〕)

この「文学」の領域が、先の『日葡辞書』のガクモン・ブンガクの両記述を覆う事はあきらかであろう。「文学」の文献初出例とされる『論語』の「文学、子游、子夏」の「文学」を疏は「文章博学」と説くが、当該の例も変りない。

ところで『日葡辞書』で「ブンを学ぶ」「フミ学ぶ」というパラフレーズにあらわれる「ブン」「フミ」を『日葡辞書』は次のように説明する。

Bun. Estillo de escrever cartas. Item, Letras, & sciencia.

Bunpuga nidō. Letras, & milicia, que são duas aries.

(書状を書く文体。また、学問。文武が二道。学問と武道という二つの道。)

Fumi. Carta. Fumiuo asobasu. Escrever carta pessoa nobre.

Fumiuo faiqen itasu. Ler carta cõ reverência.

Fumiuo xitatamuru. Escrever, & concertar, dobrar, & fechar a carta.

Fumiuo todoquru, Entregar a carta pera quem vai.

(書状。文を遊ばす。貴人が書状を書かれる。

文を拜見致す。敬って書状を読む。

文を認むる。書状を書き整え、折って封をする。

文を届くる。書状を宛名の人に手渡す。)

この「ブン」も「フミ」も“carta (書状)”関連の語という共通性がある。

3. 〈学問〉と〈学文〉

ところで、中世には、〈学文〉の表記が優勢だったことは、古本節用集を眺めてみるだけでもわかるが、〈学問〉がないわけではない。[注9]

明応本	学文 [ガクモン]
天正17本	学問 [ガクモン]、学文 [ガクモン]
天正18本	學文 [ガクモン]
早大本	学文 [ガクモン]
饅頭屋本	孝文 [ガクモン]
黒本本	学文 [ガクモン] 又学問
易林本	學問 [ガクモン]

このような古本節用集群の記述から〈学文〉と〈学問〉とが、表記としてゆれていたことがうかがえるが、テキストによっては、ある分布を示すものがある。

例えば、『室町時代物語大成』所収の『秋の夜長物語』の異本群にはガクモンジョの表記が次のように現れる。

永和本 桂寿、シハシカ程ノ宿借テ、或坊ノ学文所ニ置タレハ、…

文禄本 桂寿、しはしか程の宿借て、或坊の、学文所に置たれば、…

古活字 桂寿、シハシノ程ノ、宿カリテ、アル坊ノ、学文処ニ、置タレ
ル本ハ、ハ、…

古絵巻 桂寿、しはしか程、宿かりて、或房の学問所に、をきたれば、…
絵巻 童、しはしか程の、宿かりて、ある坊の学問所に、をきたれば、…

ここに、写本・古活字本と絵巻本との差、という奇妙な分布がうかびあがる。この差は、完全な異本関係ではないが、同大成所収の『恵心僧都物語』諸本にも見られる。

絵巻（応永八年1401の絵巻の摸本）
最上器量の僧侶、六十人を撰て、学問をさせられけるに、…

室町末写本
イカナラン僧坊ニモ近付テ、学文シテ僧ニナリ、必ス我菩提ヲ訪ヘヨトテ…
イカハカリソヤ、一時片時モ、寸ノ隙ヲ惜ンテ、学文ヲシ給フヘシ…
親ノ見タケレハトテ、学文、違ヲ、空クシテ、…
少児ヲ御覧シテ、利根聡敏ノ相アリト悦ビ、学文セサセ給ニ、…
未タ若ク座時ハ、御学文アレトテ、左右ナク免シ給ハサリ…

寛文版本

いかならん僧坊にも、ちかつきて、学文をして、貴き僧となり。…
一時、片時の間成とも、寸のかけをおしんて。学文、能^レし給ふへし。…
学文、能^レして、貴き僧に成て、一天の帝にも、しられたてまつらん時。…
学文を、せさせ給ふに、一字を教るに、千字のさとり、明かなり。…
我始て、山寺にのほる時、母の仰に、学文能^レして。…
御身いまた若き時、能^レ学文あれとて、左右なく、御ゆるしなかりければ、…

写本・刊本／絵巻というスタイルの違いと、表記の違いがここでは並行的な現象として現れるが、偶然の現象か、また意味のあることなのか、今のところデータが少な

いだけに何とも言えないが、おそらくは個別的な現象にとどまるだろう。

ところで、抄物資料には比較的多く〈学問〉表記が見られる。まず古活字版本によってみると、『毛詩抄』には〈学問〉しか見られないし、『蒙求抄』『史記抄』では、両表記が見えるものの、〈学問〉の方が優勢である〔注10〕。

そこで『史記抄』について〈学文〉〈学問〉の現われかたを原漢文と対照させて、また直接に清原宣賢の手になる巻が伝わる写本（京都大学図書館蔵、舟橋家旧蔵本）〔注11〕とも対照させてみたところ、当該の表記に関して、古活字本と写本との間に違いは認められず、また原漢文には、〈学問〉〈学文〉どちらも現われない。原漢文中に〈学問〉が認められる時は、その注釈文にも〈学問〉が現われ、原漢文中に〈学問〉が現われない時、注釈中に〈学文〉が現われる、といった分布がありはしないかと想像したが、そのような事実は『史記抄』に関しては確認できなかった。〔注12〕

どうも、抄物資料（漢籍抄）には、〈学問〉表記が優勢なようである〔注13〕。ただ『四河入海』のように〈学文〉（8例）しか現われない（『抄物資料集成』索引による）ものもあり、やはり〈学問〉と〈学文〉は、中世には基本的にゆれていたと考えるてよいだろう。分布の偏りは、テキスト毎の個別的な現象にとどまると思われる。

以上のように、〈学問〉と〈学文〉との表記差は個別的な使用差としては存在しそうではあるが、機能的な差は見出しがたい。しかし、後世〈学問〉と〈学文〉との表記の違いを意味の違いに結び付ける解釈家がいた。

学問と学文と、其の義ことなり、…

新井白蛾（『闇の曙』寛政元年序〔注14〕）である。彼は続ける。

學問といふは道の体用、五常の本旨、易にいはゆる窮理盡性、以至于命等の事にして、易中猶多し、中庸の性道教、大学の明德、又論語の門弟子各問を挙げて、夫子へ委しく尋繹ねて、精詳に学び、聖教の本意深理を、我が心中にとくと透徹發明せし如く、今日の人も、切に問ふて近くおもひ、聖教の旨趣を能々曉會領解し、天より稟得たる明德本心を曇らぬ様に、一生目出度く持ち行ふ身の為にするの学を学問といふ也、

学文とは、博く文を學んで、これを約するに礼を以す、又文学には、子遊子夏と有る類ひより、小学輩の書を讀とある、皆書籍より道に入る事也、…

つまり、〈学問〉を〈学文〉に比してより思想（「道」）的なものと位置付け、〈学文〉を技術的なものとはせず、「文字を覚え書物をよむ」だけの儒者は「俗儒」「腐儒」「盜儒」という「賤稱」を以て呼ばれ、「学文の本義、聖教の本味を取り失ひたるもの也」と非難し、〈学文〉は「聖教の本味」を正しく理解することであるとしている。しかしこの解釈が、当時の学者批判のために持出された解釈であることはいうを待たない。

扱俗儒腐儒の輩より、士農工商の中にも、少し文字よみも覚え、雜書などもひねくり廻せば、愚俗の文盲なる目よりは、天晴なる学者とおもひ、誰々は大学者など呼びはやし、美立つる其人に、おもひの外不埒放蕩もの、又屹度馬鹿多し、此等は一文不通の人よりも、却つて遥かに劣りたる愚人なり、…

どのみち彼にとってガクモン（学問・学文）とは、「雜書」を読むことなどではなく、「聖教」を対象したものでしか有り得ない。そしてこの「聖教」とは、当然のことながら中国古典である。「古ノ學問トハ、先聖孔子ノ道ヲ學フ」（『経子史要覧』上〔注15〕）ものであり、「古ノ學問ハ、詩書禮樂ヲ學フヨリ外ノ事」ではない（同）。宣長が「世ノ中に學問といふは、からぶみまなびの事」（『玉勝間』一之卷〔注16〕）という一般的な理解を嘆いているように、ガクモンと中国古典との結び付きはかなり強いものがあつたのだ。

とにかく、えせ学者批判のための方法として、白蛾はまず世に行われているガクモンの二つの表記にそれぞれ意味の違いを持たせ、更にその意味を説いた。その説明は、〈学文〉を「博く文を學んで…」とするように、文字について語源を与える、民衆語源にはかならない。（念の為に言い添えておかならば、今ここでいう民衆語源とは、「誤った語源」という含みをいささかも持たない。〈学問〉と〈学文〉との本来的な違いが、歴史的関連に於いて説かれずに、専らその文字面（漢字による語形）について

の解釈になっている、という意味で民衆語源と呼んだまで。)そして〈学問〉は、〈学文〉に対する解釈によって位置付けられていると見てよいだろう。

しかし結局のところ、〈学問〉と〈学文〉との間に意味の差があったとは思えない。民衆の間では、どちらの表記をとろうとガクモンに変わりはなかったのだ。

学文か棚へ上て声かハリ (『誹諧武玉川』八篇) [注17]

學文とはしこへ飛でのほられず (『誹風柳多留拾遺』第十篇) [注18]

学問のしやまだとほたる一ツやり (『誹風柳多留拾遺』第四篇)

白蛾の〈学問〉と〈学文〉の違いの主張、つまり「文を學」ぶのが〈学文〉であるという説明は、先に触れたように、既に『日葡辞書』にも見える記述であり、その意味で、白蛾ひとりの解釈ではない。そしてその〈文〉は「Bnpuga nido. (文武が二道)」(『日葡辞書』「Bun」の項) という表現に見られるような〈武 (milicia—『日葡辞書』)〉に対立する広い概念ではなく、より狭く中国古典を対象とするものとして位置付けられている。

4. ガクモンとブンガク

ここでヘボンの辞書草稿に見られた、ガクモン対象が中国文学に限定されるという表現 (“applied only to Chinese lit” “(Gakumon) szru. to study Chinese literature.”) が思い起こされる。ヘボンは初版以降ではこの表現をすてているが、それは殆どそのままブンガクの方に横滑りしている。

Bungaku szru 文學 to study reading & writing. (草稿)

BUN-GAKU, ブンガク, 文學, Learning to read, pursuing literary studies, especially the Chinese classics. (初版)

“especially the Chinese classics.” という注記は、かつては学問対象となり得るものが中国古典に限られていたから、などという極めて消極的な理由の文言と理解するのではなく、既に国学も興り、さらには洋学が盛んになってきたこの時代のコン

テキストにおいて強く理解されるべきである。つまり、ひらたく言えばガクモンが既に中国古典を学ぶものだけではなくなってきたことに対する伝統の〈あがき〉が、せめてブンガクにその席を求めようとした、その現われと映る。

言うまでもなく、〈文学〉の、その本家での用例は『論語』にまで遡る、由緒正しい語である。しかし、現代中国語における〈文学〉は、日本から逆輸入された新鑄のことばである（高名凱ほか1958、1985）。それは、まさにこのヘボンの時代に、翻訳語として再生した〈文学〉が、近代思想を受入れるための受け皿として、有効であったからに他ならない。“especially the Chinese classics.”という注記は日本に於いてこそ意味のある記述ではあるが、そのような限定はブンガクということばの慣用を、事実上殆ど束縛していなかったと見てよいだろう。だからこそ、中国に我が国のブンガクは渡り得た。

ヘボンの辞書に於いて literature という語がガクモンの方に現われ、ブンガクの方に出てこないが、3版になると、次のように literature が登場する。

BUNGAKU ブンガク 文學 Literature; literary studies; especially the Chinese classics.

literature の意味は、このほぼ一世紀前の1755年にロンドンで出版された Samuel Johnson の英語辞書 (A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE) によれば、“learning; skill in letters”とあり、英語の側にも意味の変化があったことは人のよく知るところである〔注19〕。日本側の資料でも、「文学」に literature を対訳させる辞書は明治初期から見られるが、同じく「文学」をガクモンと和らげる簡易辞書も極めて多い〔注20〕。

ところでヘボンの辞書諸本（和英の部）における literature の現われかたは次のようである。

	ガクモン	ブンガク
草稿（1860年代初）	○	×
初版（1867年・慶応3）	○	×

二版 (1872年・明治5)	○	×
三版 (1886年・明治19)	○	○

三版に至ってブンガクの対訳語として採用されたことは、現在の意味での「文学」が定着しかける時期を明治18～19年とみる小堀桂一郎の説（小堀1975）と考え合わせると興味深いものがあるが、「19世紀後半のイギリスにおいてさえ、英語の“literature”が近代的概念としては十分に定着しきらず、旧来の意味と併用されていた」（磯田1983）ことを考えると、アメリカ人であるヘボンの場合も、彼自身「旧来の意味」と「近代的概念」とを併用できるようになったのが、三版になってからではないかとも想像される。

5. 学文から学問へ

〈学文〉が〈学問〉に変化した（回帰した）要因は、一つにはガクモン対象が「文」では収まり切らなくなってきたことにある。そういった事情に応えるのに、ガクモンが選ばれるには、やはりそれなりの理由があったと思われる。時代はまた中世末期に戻るが、既に『ラポ日対訳辞書』[注21]にガクモンは多く次のような形で現われる。ラ日の部分に絞っていくつか示そう。

61L2	Architectonice	Sumicaneno gacumon.
64L9	Arithmetica	Sancan, vel, sanyôno gacumon.
71R10	Astrologia	Foxino gacumon.
71R12	Astronomia	Foxino gacumon, yeqigaqu.
171L19	Cosmographia	Xecaino zzu, l, xecaino zzuuo caqu gacumon.
231R14	Edictales	Coccauo vosamuru gacumõ uo suru fito.
249R6	Ethice	Guiôguiuo vosamuru gacumon.
310L2	Geodaesia	Monono daixôuo facaru gacumon.
310L8	Geometria	Gidaiuo cangayuru gacumon.
316L8	Grammatica	Cotobano tçuraneyo, monouo caqu tenifauo voxiyuru gacumon.
425L7	Literatura	Grammaticato yû gacumon. Manabiyetaru chiye,

		gacumon.
427R7	Logica	Logicato yū gacumon.
447L11	Mathematic'	Matematica toyū gacumōuo tçutomeru fito.
478L1	Musica	Vtaino narai. Xitçuqegatano gacumon.
499R3	Numeralis	Cazu, l, sâyoni ataru coto. Cazu, l, sancânō gacumō.
585R7	Philosophia	Gacumonno fuqi, l, banmotno riuo aqiramuru gacumon.
586R16	Physica	Banmotno riuo aqiramuru gacumon. Cane gacumōuo suru qiōjacu.
652R1	Provincialis	Cuni, l, qiri xitageyataru cunini ataru coto. Cunino matçurigotono gacumon. Miguino cunino giūnin, l, soconi sumu mono.
700L3	Rhetorica	Rifiuo vadachi benjetni monouo yū yōuo voxiyuru gacumon.
700L9	Rheticus	Rifiuo vadachi benjetni monouo yū yōuo voxiyuru gacumon. l, fitoni ataru coto.
822R8	Theologia	Deusno von cotoni tçuiteno gacumon.
822R13	Theoretice	Quannen, cufūno gacumon, l, funbet nomini ataru gacumon.

ガクモンがこのように「文」を超えた領域の学に対してまで用いられる慣用が既にあったのだ。「墨曲尺(スミカネ)のガクモン」(建築学)や「星のガクモン」(天文学)などがそれだ。

“Literatura”を「Grammatica というガクモン」とするのは、元々ラテン語の *literatura* がギリシャ語 *grammatike* の訳語であることに起因する説明であると思われるが、他に「学び得たる智慧」という訳とともに、「ガクモン」のみの訳語を与えられていることは、先の近代資料の記述を遡らせるものとして注目される。

しかし「…のガクモン」「…というガクモン」などという形式で説明される項目が多いことから判るように、ガクモンが近代的な概念としての〈学問〉と同じ働きを担わされている事、否、同じ働きを担わせ得ることば(概念)であったことは更に注意してよい。これが外国資料であるところにいささかの恨みはあるけれども、「日本語

を知悉しラテン語を修得した日本人伊留満二人」(ペドロ・ゴームス書簡1595年10月12日〔注22〕)が『ラポ日対訳辞書』の翻訳に加わったことを考えれば、当時の日本語に対する内省とみてよいだろう。

つまるところ、ガクモンと「文(学)」との結び付きの強弱の歴史が、一旦は〈学文〉を生み、そして次には、〈学問〉を採用していった。そして、その〈学問〉は、近代になって、その訳語として science と深く関わっていくことにより、「文」のみとの親密な関係に決定的に終止符を打ったのだ。

【注】

〔注1〕本稿で使用した和英語林集成の諸テキストは次の通りである。

草稿 明治学院大学図書館蔵

初版 タトル版複製

2版 東洋文庫版複製

3版 講談社学術文庫複製

〔注2〕この草稿本の漢字表記には、ペン書きのものと同細の筆書きとがあり、松村1970(p. 375)では、前者についてはヘボン自筆と見、後者については「今後の研究にまつべきところ」としているが、私の見るところ、どちらもヘボン自筆と見ておそらく間違いない。ヘボン自筆の漢字表記が確認される資料については、「仁徳」と記した書が知られている(高谷道男編訳『ヘボンの手紙《増補版》』口絵)が、この2文字だけについてのみ草稿本の漢字表記と対照してみても、同じ筆跡と考えられる。他に「神惟一旦神與人之間…」と記した書や、日本人に宛てた書簡が残っているので(『一采日100年記念—ヘボン展出陳目録』神奈川県立図書館1958.11、『ヘボン展(パンフレット)』有隣堂1976.11)、それらを直接見られれば、より確かな調査が可能になるが、残念ながら未だその機会を得ていない。

〔注3〕初版序文に“the Japanese and Portuguese Dictionary published by the Jesuit missionaries in 1603”とあるのが、まさしく『日葡辞書』と見られる。しかし海老沢有道1981は、ヘボンが本当に『日葡辞書』を「入手、参考にしたかどうか」「若干の疑念をもたざるを得ない」としている。その理由は『日葡辞書』そのものが稀覯本であり、ヘボンが「いつ、どこで参考にし得たのか」が、「史料上」から考えにくいからとし、内容の比較調査が必要であるとしてい

る。ただその場合、『日葡辞書』の翻訳版と言える『日西辞書』(J. Esquivel、1630マニラ)と『日仏辞書』(L. Pages、1862-1868パリ)とが知られており、これらを利用した可能性も考えなければならぬであろう。

『和英語林集成』初版と、『日葡辞書』『日仏辞書』を比較調査した岡本勲氏の報告(岡本1973,1974)によれば、『日仏辞書』を利用した可能性があるという。

[注4] 初版序文に“the small vocabulary of Dr. Medhurst published in Batavia in 1830”として触れている。引用は、メドハースト著『英和・和英語彙』(複製本、キリスト教資料刊行会1970.12)による。[注5] 参照。

[注5] 明治学院大学図書館所蔵のメドハーストの語彙集は、ヘボンの手沢本(一部別人の書入れあり)であり、扉に「J.C. Hepburn / 1859」という署名と、本文にいくつかの書入れがある。1859年といえば、ヘボンが来日した年であり、日本語の学習のために本書を用い、またこれが自らの辞書編纂の参考となったことは疑いない。しかし、全部で350ページほどの語彙集に、ヘボン自身のものと思われる書入れがあるのは56ページ分で、また197ページ以降は全く書入れがない。これからするとそれほどの利用価値はなかったのかも知れない。ただ問題はそう単純ではない。この本は200ページまでと201ページからとでは、全く紙質が違っており、これが元来そういう本であったのか、何等かの事情で後で2つの本を継ぎ合せた本なのか、再製本された現在の状態からはまったく判らない。もし、後者のような事情が存在したとすれば、197ページ以降に書入れがないことについて、それをヘボンの意志とみることは必ずしもできない。

ただ、内容についていくらか比較調査をしてみると、メドハーストの訳語を採用するケースはあまり多くないようである(当該の問題のガクモンの訳語 Study についてもそうである)。語彙集の和英の部は、157ページから始まっており、197ページ以降全く書入れがないことと併せ考えると、やはりヘボンは自らの辞書記述に関しては、メドハーストの語彙集をあまり参考にしていなかったと考えた方がよさそうである。

[注6] 『日葡辞書』の記述に関して、(※)内は、全て『邦訳日葡辞書』(岩波書店)の訳文である。以下同じ。原文は勉誠社版複製本による。

ところで、当該の記事は邦訳版(初版)には「文字または学問の勉強」とあるが、ここは原文(Estudo de letras, ou sciencia)からすると、「文字の勉強、または学問」とした方がよいと思われる。「学問の勉強」(Estudo de sciencia)というのは、いささか考えにくいのではないか。

[注7] 京都大学国文学会編複製本(永平寺本)による。

〔注8〕「ササン」では意味不明（京都大学文学部言語学研究室蔵写本も同じ。鄭光編著『諸本集成倭語類解』太學社（韓国）による）。韓国国立中央図書館蔵本では、書入れによって「ミサン」とすべきと思われる書入れがある（『諸本集成倭語類解』が、これまた意味不明。『倭語類解』を粉本とするメドハーストの『朝鮮偉國字彙』（鄭光編『朝鮮偉國字彙』弘文閣（韓国）による）にも、「ササン」とあり、現存する『和語類解』諸本は全て「ササン」であることになるが、既に金沢庄三郎氏（『日語類解』）が校訂したように「ケサン」の誤りと思われる。おそらく、ハングル字の刻字レベルでの誤りであろう。

〔注9〕かつて、福島邦道氏の『サントスの御作業のうち抜書』翻字版（勉誠社刊）に対して、亀井孝氏がかなり厳しい態度で論評を加えられたことがあった（亀井1981）。その中で、福島氏がガクモンを全て〈学問〉の表記で通していることに、「歴史主義に立つかぎり」「学問」とするより「学文」とする方がこのましい」と述べておられる。勿論亀井氏の言うとおり「室町時代の頃の慣用」としては、〈学文〉を選ぶべきであった。『日葡辞書』の記述、『落葉集』の表記、また何よりも『サントス』の〈和らげ〉を参照すれば〈学文〉とすべきところ疑いはない。

ただ〈学問〉の表記がこの時代に見られないわけではない。本稿でも示すように抄物資料についてみるならば、〈学問〉表記はかなり見られる。

また物語資料に見える表記例には、〈学問〉〈学文〉「かくもん」「かくもん」などがある。不正確ではあるが、『室町時代物語大成』全15巻のうち、第8巻までの調査の結果（延べ数）を次に示す。

学問	4
学文	18
かくもん	11
かくもん	37

周知のように『室町時代物語大成』とはいっても、文献そのものが室町時代に属さない江戸期の写本・刊本も多く採用されているので、これを表記資料としてみる場合、直ちに室町時代の表記の実態とすることはできないという恨みはあるが、中世から近世初期にかけての実態と見ても、今の場合問題はないと考える。

〔注10〕『毛詩抄』『蒙求抄』『史記抄』における用例調査の結果を示す。用例検索には『抄物資料集成』所収のテキストおよび索引を用いた。（索引に洩れた用例も若干拾ってある。）

	学問	学文
毛詩抄	7	0

蒙求抄 1999.10 3
史記抄 1999.10 3

〔注11〕 亀井孝・水沢利忠著『史記桃源抄の研究（本文篇）』（日本学術振興会）による。

〔注12〕 注10に示した通り、『史記抄』には、〈学文〉3例、〈学問〉10例が拾えるが、〈学文〉3例が巻10のみに偏在していることが見て取れる。これが筆録者や、書写者の違いなどの分布と関連するのかどうか、未だ調査の機会を得ていない。

〔注13〕 出雲朝子・豊島正之『『玉塵抄』と計算機』（科研費報告書）添付のフロッピーディスクに収められたKWIC索引によると、『玉塵抄』の巻一・巻七にも、「孝問」表記しか見られない。

〔注14〕 「寛政三年辛亥九月発行／文化十三年丙子二月規版／浪速書林／心齋橋通安土町／吉田善蔵」の刊記を持つ、刈谷市立刈谷図書館村上文庫蔵本による。ルビは省略。また、句読点を適当にふった。

〔注15〕 荻生徂徠口述・三浦竹溪筆記。徂徠死後80年近くたって森直が出版した文化元年1804版による。『荻生徂徠全集』1（みすず書房）に復刻所収。

〔注16〕 『本居宣長全集』1（筑摩書房）による。p.47

〔注17〕 岩波文庫による。

〔注18〕 岩波文庫による。

〔注19〕 雄松堂版複製本による。また、ヨーロッパにおける literature をめぐる思想史については、ルネ・ウェレックの「文学とその類似概念 (Literature and its Cognates)」(『西洋思想大辞典 (Dictionary of the History of Ideas)』4, pp.190-198) に概説的な説明がある。

〔注20〕 惣郷正明・飛田良文編『明治のことば辞典』（東京堂出版）「ぶんがく」の項参照。

〔注21〕 勉誠社版複製本による。また用例検索には『ラホ日辞典の日本語』（金沢大学法文学部国文学研究室編）を用いた。

〔注22〕 勉誠社版複製本（『羅葡日対訳辞書』） 解題 p.5

【引用・参考文献】（資料として用いたテキストについては、各注で示したので載せない）

- 磯田 光一 1983.10 訳語「文学」の誕生 『鹿鳴館の系譜』所収 講談社文芸文庫1991
海老沢有道 1981.4 『日本の聖書—聖書と訳の歴史—（新訂増補版）』 日本基督教団出版局
岡本 勲 1973.8 『和英語林集成』と『日葡辞書』（研究篇） 『中京大学文学部紀要』8-1
岡本 勲 1974.1 『和英語林集成』と『日葡辞書』（資料篇） 『中京大学文学部紀要』8-3

- 亀井 孝 1981.6 愛語愛言のたましいのために 『国語史への道』所収 三省堂
- 小堀桂一郎 1975.2 「文學」といふ名稱 『明治文学全集』79 月報82 筑摩書房
- 松村 明 1970.8 ヘボンの『和英語林集成』について 『洋学資料と近代日本語の研究』
東京堂出版
- 高名凱・劉正埭(鳥井克之訳) 1988(原書1958) 『現代中国語における外来語研究』(関西大学
東西学術研究所資料集刊16) 関西大学出版部
- 劉正埭・高名凱・他 1985 『漢語外来詞詞典』 商務印書館・上海辞書出版社

【付記】

ヘボンの自筆和英語林集成草稿および、ヘボン手沢本メドハースト語彙集の閲覧に当たっては、明治学院大学図書館のお世話になった。また、原稿をお読み頂いた査読委員の田島優氏からいただいたコメントによって、論述の不適當所を訂正することができた。記して謝意を表する。

(愛知学院大学)